

「被災と鎮山親水」について

内山村長 語る !!

司会者：「本日は 村長の鎮山親水に対するお考え をリサーチする目的でお伺いしました。村長ご自身の幼少時からの山や川に関する体験や記憶にも大変興味があります。今後、お伺いさせていただき内容の中から普遍的なテーマを取り上げ、新しく出来る山江村復興ポータルサイトの中で取り扱って行きたいと考えています。未来への思いや、例えば 20年後の村はこうあるべきだ というようなメッセージでも構いません。ぜひお聞かせください」



村長：「今朝の復興会議でも単純に記録（媒体）という表現があつて、これは災害記録の作成を意味しているのですが、私はそういう単純な発想ではなくて、もっと創造的なもの。山江村の過去から現在、未来への展望を示すものが必要なのであつて、今後企画していただく災害復興の為のポータルサイト作りについては、課長自身が先頭になって陣頭指揮（エスコート）をしていただきたいと改めてお願いをしてきたところです」

司会者：「それでは、ここから早速インタビューに入らせていただきます。まず村長ご自身の体験を、災害発生のその日7月3日の記憶に基づいてお話ください」



村長：「その日（R2/7/3）は、午前中から昼にかけて晴れていました。夕方になって、先に球磨村の方が「高齢者避難情報」を気象庁が発令した。夜の9時頃から大雨が降り始めて、鹿児島県側、球磨川の南側に線状降水帯がかかったという情報が入って、役場に入った。とにかく大雨がひどいという事で、そして次に南の方の山田地区に続けて「高齢者避難情報」を発令。その後数時間で線状降水帯が北上して、深夜12時をまわる頃には万江川が増水したという情報が入りましたので、「高齢者避難情報」と一緒に「避難勧告」を発令。役場のOBがその近くにいたので、川の状況を聞いた。まだ川の水位はあと2メートルあるので大丈夫との事でしたが、とにかく危ない時は逃げてくださいとメッセージを伝えた。その後



災害当時の様子を振り返る内山慶治村長

状況を確認、ところが朝方には川が増水。これは大変だという判断になった。その頃、人吉市長も同時に防災無線で避難を呼びかけていたと聞いています。田んぼの横を水がどんどん流れていく、こういう現象は今までにない災害であると痛感した。その直後、淡島神社の近くの藤田商店の前の県道が50メートルにわたって崩落した。交通手段が寸断された。そしてその上の22の地域（集落）が一気に孤立。まだ川もどんどん増水していた。今回の雨は、川が増水し集落を襲った災害。高速は大丈夫。林道はまだ大丈夫なので、そこを使えばどうにかして地域に入っていける…そう判断しました」

司会者：「ということは、通常であれば大雨と共に流倒木が被害を大きくしていくものですが、今回の被害は先に川が氾濫した事によるその後の被害拡大という理解ですね」

村長：「ただ上流部を見ると分かるように、山も相当崩れているので、土砂ごと木も下流に流れてきている。だからそれが余計に川の水位を上げてしまって被害を拡大した。今までは“シトシトザーザー”で川の側の県道は問題なく山奥がやられるが一般的ではあったが、今回はその逆であった。それによって次の日から物資の運搬が課題となった。一番の問題は高齢の方々への対応。特に薬を飲まねばならないの方々への供給をどうするか。だから物資の運搬と同時に高齢の方へ、必要な薬を確認して回った。以前の災害で、同様の経験があったのでその経験が今回は生きました」

司会者：「今回の災害の時は、数年前の経験を生かして防災無線で住民に呼びかけたと伺っています」



村長：「今回は被害が甚大で職員が現地に直接入るのは難しかった。早々に自衛隊の災害派遣を要請し、隊員が重い荷物（約 40 kg）を背負って現地まで行ってくれた。でも尾寄崎という地域については、橋の上に土砂が埋まっていたので発災直後は、職員も寄り付く事も出来なかった。その間、防災無線で皆さんを救出の為に職員を向かわせますのでもう少し待っていてくださいと呼びかけ続けた。それで6日の夜やっと現地に辿り着けて、全員の無事を確認した」

司会者：「当時の村長の呼びかけ、その防災無線の声は、住民の方には聞こえていたのですか？」

村長：「聞こえていたと言います。2日にわたって呼びかけていたメッセージ、心配になって避難された住民の方に聞こえていましたか？と尋ねると『ありがとうございます。明日ヘリコプターが来ますという情報はしっかり我々に聞こえていました』と言われ本当に良かったと思いました」

司会者：「災害の時は、携帯もダメ、通信はことごとく寸断されます。打つ手がなくなると思いますが、あの雨足もひどい中で、よく防災無線での呼びかけを実行に移されましたね」

村長：「本当は携帯があればつながる地域。あそこは基地局がある場所だから大丈夫…ところが、停電で何も伝える術がなかった。全く人も入れない。後に航空写真などで見ると道なき道を最終的には救助のために入っていったのが分かる。救助する側も大変危険な任務であった事は間違いありません。それでも住民の方の不安を少しでも解消できたのではないかと思います」

司会者：「こういう状況下で、村長の自らの言葉でしっかりと語りかけて行ったという事は、住民の方にとっては、大変心強かったのではないのでしょうか」

村長：「そうであれば有難いことですが、他にも甚大な被害箇所は色々ありましたしね」

司会者：「遡ると過去にも沢山の災害はあったと思いますが、今回の災害はこれまでにない経験であったと言えますね」

村長：「そうです。危機管理というものは、まず先手先手に物事を考えていく必要があります。空振りでも良いからまずはやってみる。もちろん職員には、ひっ迫した状況下で、相当つらくあたってしまった記憶はありますが、災害対策本部をここに置き、県の副知事とのやりとりは、携帯電話を机の上に置き、外部スピーカーにして皆と情報の共有化をはかりました。そして災害から発生4日目で仮設住宅の着工に踏み切りました（7/7の時点で仮設住宅25戸と決定）」

司会者：「現場におけるトップとしての判断において、何か大事な事、これだけは伝えておかなければならないという事はございますか？」

村長：「やっぱり私は対策本部の長ですから、それぞれの部署からの情報が一気に集まる。しかし、その情報が同時に必要な箇所にはうまく伝わっていかない。だからこそ、先ほどの例もそうですが、各部署の長を前に、自分のスマホは机の前に置いて皆に共有をしながら、決断をしていく手法を取りました。なぜそういう決断をしたのかが分かるようにしていく事が大事じゃないかと考えています。これはまさに情報共有、ICTの活用です。災害の現場においても、平時と同じで、住民一人一人が発信者、主体者であるのであって、今何が現場で起こっているかをしっかりと発信してくれれば、こちらもそれをうまくキャッチし、次の対応に生かしていける。そういう仕組みを平時においてもうまく作り上げていく事が大切なのではないかと強く思いました」

司会者：「今回、災害後の住民の皆様からのヒアリングの中で、上の方の集落に住んでいらっしゃるお年寄りの中には、災害時に地域のコミュニティの力によって、逆に助かったという例などもあったのではないですか」

村長：「そうですね。増水し越水した集落、柚木川内（ゆのきごうち）という地域があるのですが、『おい！水が来っぞ、逃げよ』ときちんとした見守りの人がいて、逃げるタイミングをきちんと住民自らが把握していた。2メートル位の余裕がある段階では『まだまだ逃げんぞ』という判断。でもその数時間後、いよいよ危なくなると『逃げっぞ！』と、こういう判断が住民達自身が出来ている。これはまさに“かちやり”結（ゆい）の精神だと思います」

司会者：「ここで今回 村長が掲げられた“鎮山親水”というものの真意を分かりやすくお話いただけますでしょうか？」

村長：「“鎮山”については、例えば、各家の守り神は仏壇や神棚ですよね。では集落の守り神は？ そこにはお堂があります。そしてもっと大きな単位では“山田大王神社”や“万江阿蘇神社”などのお社があ

る。山江村にはしっかりと今でもそういう歴史や文化が息づいている。すなわち山の神様が存在し、我々住民の暮らしを見守ってくれている。森林関係者は今でも事故防止を祈願し、神様がお怒りにならないようにしっかりと祀りを行って来ている。そういう伝統文化の継承によって、この地域の安全が守られてきたという事をしっかりと知る事。

私自身は、長い役場勤務時代を通して、人々が山に入らなくなってしまった事に関する危機感があった。山江村役場に勤めた当初、林業総売上、GDP 予算は 20~30 億円程度あった。ところが今ではその予算は 2 億円程度、10 分の 1 から 15 分の 1 程度に縮小してしまっている。かつては田んぼを買うより山を買えの時代だった。それが大きく変わってしまって、結果として山の姿は大きく変貌してしまった。焚き物（マキ）が積んであるのが昔の山江村の自然な風景であった。子ども達は、親から山に焚き物を積んでけえ〜っと言われ、手伝いをしに山に入っていた。すなわち山の掃除を日常的に子ども達がしていた事になる。藻谷浩介氏の書かれた著書『里山資本主義』で、山は資源（燃料）の宝庫と説かれていますが、そこに気づかなければ、このような災害はまた起こると思っている。我々は、あまりに暮らしの中で山と関わらなくなってしまった。121 平方キロある山江村の土地は、本来、“宝”資源に満ち満ちていた。そういう事を踏まえての“鎮山”であります。

“親水” についても同様で

これは山江村だけの問題として局所的に捉えるのではなく、山から海までの全体を流域として捉え、この問題（これからの数十年をどう自然と向き合って暮らしていくのか）を考えていく。我々山の民は海の事を知らない。逆に海の民は山の事を知らない。災害後に、海の方々から聞いて驚いた事は、船のスクリューに木材が絡みつき漁に出れず大変だったと言う。中流域は中流域で、同じく沢山の被害が出ている。だからこそ全体としてこれらの問題に取り組んでいきたいと思います」

司会者：「村長の幼少期の川にまつわるエピソードは？」

村長：「魚を付くモリを持って川づたいによく魚を取りに行きました。夢中になって気が付いたら隣の人吉に入っていたという事はしょっちゅうありましたね。川遊びと食料を採るという事は一緒の事だった。上流で、牛飼いの人などがいて、牛の体を洗ってやっている。するとフンがどんぶらこと流れてきて…『おう！これはまずい。逃げよ〜』とか（笑）」

司会者：「今の時代は川での遊泳などは出来るのでしょうか？」

村長：「山江村では、親御さんが一緒であれば大丈夫です。万江川などは夏にはテントの花が咲くと言われておりまして、多くの方が川に親しんでいらっしやいますよ。特に万江地区

にお住まいの方々は、川に誇りを持っておられて、万江川塾という組織なども存在します」

司会者：「取材して感じた事として、この地には神々がそこに生きていらっしゃるなあという感覚があります。役場職員の方が以前お堂の説明をして下さいましたが、あがる前に「ちょっとお待ちください」と言って、自然にホウキでそこを掃いて『さあどうぞ』と言う。そんな事を自然に出来るという事が素晴らしい事で、これはおじいちゃん、おばあちゃんの時代から当たり前前にやって来ている事なのでしょうね」

村長：「そうそう！我々の集落の神さまは木造だったんですが…女の子は、木の神様をおんぶしてお母さんごっこ遊びをしたり、男の子の中で悪い子は、それに小便を引っ掛けて遊んでいる始末…いや～今考えるとこれはバチ当たりなんでしょうが、でもそれでも大丈夫！子ども好きの神さまだった様で、全然怒られなかった。そして遊んでいるうちにそれがどこに行ったか分からなくなったりもして…でもなぜかお祭りの前にはきちんとお堂に戻って来ている。実はそういう経験をした我々は、後にお堂がなくなってお神体だけが飾ってある姿を見て、これは不憫だという事で、神輿を造ってお祀りしようという動きになって、それが地域の活動にもつながって行った。そういう体験の中から出てきた経験や知恵。すなわち 神々が住むこの山江村をどうやって取り戻していくか、これが“鎮山親水”というテーマなのです」



新しく公開予定の「復興ポータルサイト」

山江村復興ポータルサイト ～ 鎮山親水～

🔍 サイト内検索

山江村公式HP

ホーム | 鎮山親水 | 復旧情報 | 復興プロジェクト | 災害記録 | 復興の原点 | ブログ

「鎮山親水」の理念が生まれた背景

ちょっと難しい言葉に感じる「鎮山親水」。本来は山と水を治めるという概念を表す「治山治水」という言葉がありますが、その「治山治水」へ向かうまでの方向性、旗印ということで、山江村ではこの「鎮山親水」の理念を掲げています。

「鎮山親水」について >

対談記事 >

キーワードでつかむ



1. 山の神



2. 農と水



3. 山仕事



4. 治水



5. 川遊び



6. 風びんぶ



7. 神さん運び



8. お堂に参る



9. 神輿からユキ

※本文や写真・アイコンをクリックすると説明が開きます。